



官版

國法汎論

上帙

第一冊

77
6135
1



門77
號6135
卷1

行刊月五申壬治明

イ、ガ、ブルン、セ、リ、著
從五位加藤弘之譯

國法汎論

文部省



首卷之圖



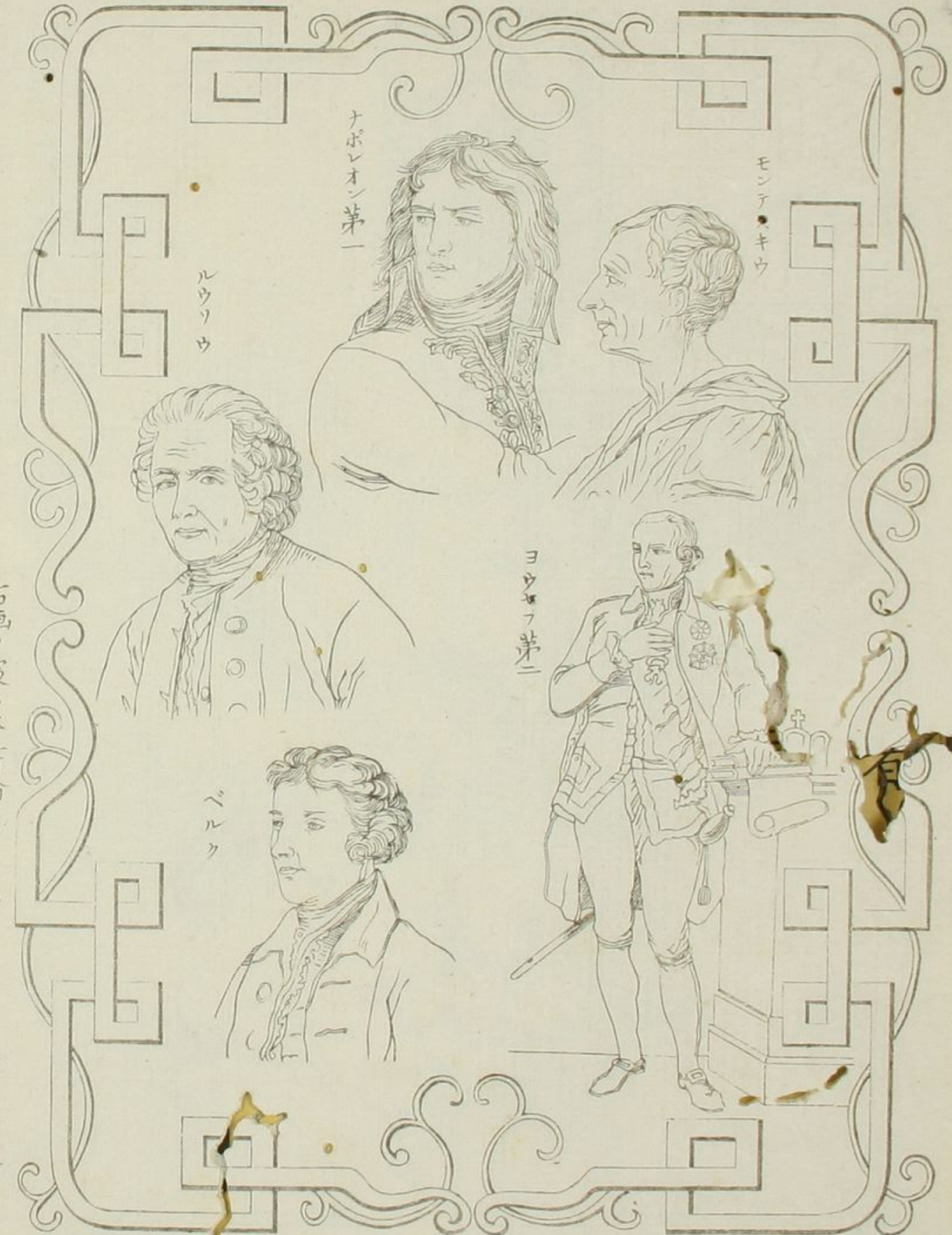
國法汎論小引

一 維新以來、廟議專ヲ開化ノ進歩ヲ急務ト為シ、制度文物ノ大ヨリ、百工技藝ノ廣ニ至リ、
 一 歐風ニ師倣ス、實ニ盛世ノ洪舉ニノ億兆ノ
 大幸ナリ、是ニ於テ洋書ノ繙譯梓ニ上ル者、陸
 續トメ間斷ナク上ハ廟謨ノ萬一ヲ裨補シ、
 下ハ斯民ノ新化ヲ作振ス、亦盛事ト謂ハサル
 可ンヤ、就中制度律令ノ事ニ係ル者、亦尠カラ
 ス、然ルニ其書タル多ク、唯各國列邦ニ於テ、
 現ニ遵用スル所ノ制度律令ヲ説ケル者ニシ

國法汎論

小引

一



右画々蒙ハ本書論說中引證スル有名ナル人物ノ繙像ナリ

畫摹寛上川

元汎々文明世界ノ法典ヲ考テ之ヲ通論スル
 者ニ非ス、而ノ能ク之ヲ通論スル者ハ、僅ニ泰
 西國法論一書荷蘭人中判事津田真道カ所著述ナリ、
 アルノミ、是故ニ余通論ノ書ヲ譯セント欲ス
 ル久シ、然ルニ王事鞅掌、未タ業ヲ起スニ暇ア
 ラス、客歲測ラス叨リニ歐洲ノ國法論ヲ進講
 スヘキノ命ヲ辱ケス、
 天恩隆渥、感竦ノ至ニ耐ヘス、宿志モ亦是ニ因
 テ果スヲ得ル、歡喜ノ窮リナキ豈啻ナランヤ、
 是ニ於テ瑞士人ブルンモリ氏述ル所ノアル

ゲマイ子ス、スタトツレフト國法論ノ義ヲ取リ、直

ニ譯業ヲ起シ、一款譯成ル毎ニ、輒チ進テ之ヲ
 侍講ス、抑、汎論ノ書タル、博採約說、詳細遺スル
 故ニ意味文義ノ間、微分細剖、ヨク其旨ヲ窮
 ルニ非レハ、其遽ニ造ル難シ、是ヲ以テ史志ニ
 深キ者ト雖、凡、沉潛反覆、玩味スルニ非レハ、
 其意ノ通スル、恐ハ易事ニ非ス、讀者先ツ泰西
 國法論ニ就テ、國法ノ大綱ヲ窺ヒ、更ニ此編ニ
 參入、其要領ヲ審ニ、後各國ノ法典ヲ涉
 獵セハ、規矩賴ル所ヲ取、宜ヲ得テ惑ハサ

國法凡論 小引

卷一

ルニ庶幾ラシ、
 一凡ノ江湖讀書ノ徒、譯書、拙文ヲ尤ル者少カ
 ラス、蓋シ譯業ノ難キヲ察セサルニ由ルナリ、
 夫レ殊方異域ノ言語文章、我ト其脈理ヲ同ウ
 セサル、恐クハ漢梵ノ比ニアラサルヘシ、況ヤ
 其説ク處、概略學科術藝ニ係ルヲ以テ、紀事史
 乘トハ、其難易亦自ラ異ルヲヤ、且ツ學科術藝
 ノ旨タル、絶テ皇漢人ノ言ハサル所ニシテ、
 人獨リ發明論説スル者居多ナリ、故ニ縱令、能
 文ノ士、刻苦勉勵シテ之ニ従事スト雖、凡目未

タ曾テ見ス意未タ曾テ思ハサル所又漢字ヲ
 以テ國文ニ属ス、抑亦難ヒ哉、而ノ讀者大約小
 説野乘ト同日ノ看ヲ為シ、唯其解シ易キヲ欲
 ス、故ニ一讀解シ得サルニ遇ヘハ、罪ヲ譯者ノ
 文章ニ歸シ、拙文讀ムニ堪ヘスト為ス、思ハサ
 ルノ甚シキ者、蓋シ讀者從來ノ癖ナリ、今者天
 下方ニ文明ニ向ヒ、學文知識漢梵ノ陋習ヲ一
 洗スルノ際、學問思辨ノ功ヲ収ル、洋書ヲ讀ム
 ニ非レハ、譯書ヲ捨テ何ニカ求シ、今ヨリ以
 往世ノ楮書者、宜シク舊弊ヲ革ム、亦野史ノ看

ヲ為サ、ルヘシ、既ニ刊布スルノ譯書、文章議論、深且密ナル者乏シキト非ラス、然リト雖モ此國法汎論ノ如キ、世未タ多ク其比ヲ見ス、此書ハ列邦現立ノ法典ヲ取テ講論スル者ニアラス、實ニ文明世界共遵スル所ノ通論公理ニ依テ、汎ク國法ヲ論述ス、故ニ文義最モ高雅、論說最モ深奧ナリ、讀者能ク意ヲ用ヒテ、反覆熟讀セサルハ、恐ラクハ其要領ヲ得ル難シ、唯取ラクハ余カ淺學努材、殊ニ漢字ニ嫻ハス、故ヲ以テ行文暗澁ナルノミナラス、著述者ノ隱微

ヲ闡揚シ、苦心ヲ發露シテ、以テ讀者ニ告ル能ハス、尚且謬語モ亦尠カラサルヘシ、庶幾クハ大方君子讀テ解セス、思フテ得サル者アラハ幸ニ忠告セヨ、余教示ヲ得テ、尋繹再思、訂正ヲ加フルハ、深ク諸君ニ望ム所ナリ、

一 此書ノ著述者ハ、氏ヲブルンタリ、名ヲヨハンカスバルト云フ、文化五年十八百零八年瑞士國ノ左リノ邦ニ生ル、夙ニ獨乙ノ諸學校ニ遊ヒ、法學ヲ研究シ、天保七年十八百零六年三ノ邦太學校ノ法學博士ニ舉ラレ、其十年十八百零九年三ノ同邦ノ

レギールンクス、ラート（按）高官ニ任シ、尋テゴ
 ロールセル、ラート（按）官（按）立法（按）統領ニ轉シ、以テ數
 年ノ間、嘗テ研究スル所ノ國家學ヲ實際ニ施
 セリ、弘化四年（一千七百四十四年）此官ヲ去リ、（註）ヘン
 獨（按）國（按）ハイエルノ大學校博士ヲ拜セリ、而シテ未
 タ其後ノ履歷ヲ詳ニセス、著ハス所ノ書數部
 アリ、就中國法國政沿革史、（ゲ）マインテス、（ア）ル
 ド、（ポ）レフナツク、獨（按）乙私法論、（ド）イトレス、（プ）トリ國家
 學韻府、（ル）スタル、（ブ）ツ、（エ）及ヒ此書ノ如キ最モ著ル
 今譯スル處ノ原書ハ其第三板ニ入、即萬延四

年（一千八百六十六年）刊行ニ係ル、凡ソ法學ハ太古希
 臘國ノ碩學（ア）立斯度德爾、（プ）ラ土及ヒ羅馬國
 ノ西塞羅等ニ淵源シ、中古新世ノ際、明君賢相
 及ヒ碩學輩、互ニ世ニ出テ、研究練磨シテ以テ、
 遂ニ今日ノ開明ヲ致セリ、然ルニ此學タル元
 形而上ニ属スルヲ以テ、其進歩モ亦物理學ノ
 如ク速ナラス、物理學ニ於テハ、今既ニ定論ア
 リテ、學者中互ニ大異アルヲ見ス、然ルニ法理
 ノ論ニ至リテハ、未ダ全ク一定ノ論アラズ、學
 者各其所見ヲ主張シ、專ラ天理ニ偏シテ論ス

ル者アリ、又古今ノ事迹ニ泥テ説ク者アリ、或
 ハ舊ヲ墨守シ、又ハ新ヲ偏取シ、其當ヲ得ル者
 少ナシ、獨リブルン左リ氏ハ此諸弊ヲ襲ハス、
 能ク天理事迹ト新舊トヲ酌量シ、折ンテ其衷
 ヲ執ル、蓋シ方今歐洲碩學中、實ニ屈指ノ大家
 ナル

一 余 清明ノ令ニ仕官シ、此時ニ於テ此書ヲ譯
 シ、若シ開化ノ一端ニ補アラハ、幸甚ト云フヘ
 シ、然ルニ卷帙浩瀚ナルヲ以テ、譯業頓ニ畢ル
 能ハス、故ニ稿本冊ヲ成スニ隨テ、文部省ニ於

テ上梓ス、全編ノ卒業ハ、夫レ二三年ノ後ニ在
 歟、

明治五年四月

從五位加藤和之識

凡例

一 書中太古ト記ス者ハ、開闢ヨリ紀元四百七十
 六年ニ雄略天皇ニ至ル世代ヲ云ヒ、中古ト記ス
 者ハ、四百七十六年ヨリ一千四百九十二年應明
 元ニ至ルヲ云ヒ、新世ト記ス者ハ、一千四百九
 十二年ヨリ一千七百八十九年寛政ニ至ルヲ
 云ヒ、又最新世ト記ス者ハ、一千七百八十九年
 ヨリ今時ニ至ルヲ云ス。

一 幾世期ト記ス者ハ、世代ヲ著ス稱ニメ、凡ソ一
 百年ヲ一世期ト稱ス、故ニ紀元初年ヨリ一

凡例

一 書中太古ト記ス者ハ、開闢ヨリ紀元四百七十
 六年ニ雄略天皇ニ至ル世代ヲ云ヒ、中古ト記ス
 者ハ、四百七十六年ヨリ一千四百九十二年應明
 元ニ至ルヲ云ヒ、新世ト記ス者ハ、一千四百九
 十二年ヨリ一千七百八十九年寛政ニ至ルヲ
 云ヒ、又最新世ト記ス者ハ、一千七百八十九年
 ヨリ今時ニ至ルヲ云ス。

一 幾世期ト記ス者ハ、世代ヲ著ス稱ニメ、凡ソ一
 百年ヲ一世期ト稱ス、故ニ紀元初年ヨリ一

年ニ至ル世代ヲ第一世期ト云ヒ一百一十年ヨ
リ二百年ニ至ル世代ヲ第二世期ト云フ他ハ
之ニ倣ス

一原註ノ短文ナル者ハ夾註トナシ長文ハ㊦㊧
等ノ符號ヲ用ヒ毎條ノ末ニ附記ス但シ讀者
ノ解シ易カラサル註及ヒ必用ナラサル者ハ
省略ニ從ス又譯者ノ註解ハ必ス〔按〕字ヲ冠
原注ト區別ス
一原語ノ旁側ニ單雙柱ヲ標ス物名ヲ識別ス十
柱單右ニ在ル者ハ名氏左ニ在ル者ハ物名及ヒ

一切ノ名稱ナリ又一柱右ニ在ル者ハ地名左
ニ在ル者ハ官職爵位及ヒ官司ノ名稱亦之ニ
屬ス即チ巴力門バルメン法府ホフ立リ會カイ議ギ
類是ナリ

知之又識

國法汎論首卷

緒論目錄

- 第一款 國法及七國政
- 第二款 國法私法ノ所以相殊
- 第三款 前款舉ル所ノ外仍國法ノ關涉
- 第四款 國法汎論及國法各論
- 第五款 國法ノ淵源 甲憲法
- 第六款 同上 乙國約
- 第七款 同上 丙慣用
- 第八款 同上 丁論究

第九款 國法及國家假法
第十款 研究ノ方法

第一編 國法汎論
第一章 國法汎論ノ意義
第二章 國法汎論ノ研究ノ方法
第三章 國法汎論ノ研究ノ範圍
第四章 國法汎論ノ研究ノ材料
第五章 國法汎論ノ研究ノ結果
第六章 國法汎論ノ研究ノ意義
第七章 國法汎論ノ研究ノ方法
第八章 國法汎論ノ研究ノ範圍
第九章 國法汎論ノ研究ノ材料
第十章 國法汎論ノ研究ノ結果

國法汎論首卷

瑞士人イカブルシテ著
加藤弘之譯

第一款

國法レフタトツ及ヒ國政チボキ

往古希臘國ニテハ、政治上ニ關係スル諸學ハ、總
テ之ヲ國政學チボキト、稱シタリシカ、近今ハ國法
學レフタトツト、國政學トテ、二科ニ分テ、各殊ノ學
科トナ
國法ト國政ハ、現ニ實際上ニ於テハ、混同シテ相

離ル可カラサル者ナルヲ、唯學科上ニ於テノミ、
 之ヲ區分スルハ、甚タ異シム可キニ似タレ、此
 事已ムヲ得サルニ出ルモノニテ、其理趣ハ、下文
 ニ於テ明瞭ナリ、○國法國政ハ、素、各殊ノ事ニシ
 テ、其關涉スル所、亦相同シカラス、故ニ國家治平
 ヲ得ル所以ノ理ヲ精究センニハ、先ツ其學ヲ二
 科ニ分テ、一ハ國家存在ノ理ヲ論シ、一ハ其元氣
 活動ノ方ヲ論ス、先ツ各科ニ就テ、其理ヲ精究セ
 サレハ、全體ノ理、得テ精究ス可ラサレハナリ、○
 學科上教ル所ノ方法、其宜シキヲ得レハ、實際上

施設ノ事、都テ其當ヲ得ルハ論ヲ須ス、故ニ國法
 國政ヲ分テ、二科ノ學ト為シ、以テ各個ニ講習ス
 ルニ至リシヨリ、國法ノ條規始テ明瞭トナリ、且
 ツ其範圍ノ増進セシテ、昔日ニ數倍シ、國政モ亦
 此混同ヲ免カレシヨリ、其範圍自ラ判然タルヲ
 得テ、進歩亦頗ル廓大ナルニ至リタリ、
 國法學ハ、單ニ今日國家ノ斯ク存在シ、且ツ規律
 ノ現存シテ、之ヲ保續スル所ノ景狀、及ヒ國家ノ
 元氣、活動ヲ生スル所以ノ本源ヲ論スルモノニ
 シテ、必竟其歸ヲ要スレハ、國家現ニ存在スル所

ノ體勢ヲ講スル學ナリ、國政學、特ニ國家ノ元氣旺盛シテ活動スル所以ヲ論スル者ニシテ、今日政ヲ施ス所以ノ目的及ヒ此目的ヲ達シ得可キ措置方法且ツ今日ノ景狀ニ隨テ彼此憲法ノ當否利害ヨリ其他憲法ノ弊害ヲ除去改正スルノ術ハ如何スヘキ等ヲ説ク之ヲ要スルニ、國家ノ發運活動スル方ヲ講スル學ナリ、國法ハ、國政ノ發動スルカコトニ、是故ニ法ト政トハ、動靜行止ノ差違アリ之ヲ生物ニ譬フヘハ、法ハ猶體軀ノ靜止スルカコト久

政ハ猶精神ノ發動スルカコトニ、國家ハ、道義ヲ具有スル一物ナリ故ニ國法國政共ニ必ス道義ノ務アリ、去レテ法政ニ科、獨リ道義ノミヲ以テ論ス可カラス、亦徒ニ此二科ヲ以テ、道義學ノ一端ト為ス可カラス、此二科ノ資ル所恒ニ國家ニ在リ、其論スル所亦恒ニ國家ニ在リ、故ニ之ヲ國家學ト云ヘシ、法政ノ二科ヲ以テ、全ク關係セサルモノトシ、嚴ニ之ヲ區分スルハ、甚タ不可トス、國家ハ生活物ナリ、國家苟クモ生活セント欲セハ、其體軀タル

法、精神タル政、兩ナカラ能ク親和混同セスハ有
 ル可ラアルヲ固ヨリ論ヲ須タス、○其體タル法
 ト雖、終始静止シテ、絶エテ變動無キモノニア
 ラス、又精神タル政モ、終始變動シテ、絶エテ休止
 スルヲ無キモノニアラス、既ニ古今憲法ノ沿革
 アリシハ、即テ法ニ變通アリシ證ナリ、又憲法ヲ制
 立スルハ、政ナレバ、既ニ制立シ了レハ、此政全ク
 止マルハ、即テ政ニ休止アルノ證ナリ、○是故ニ法
 政共ニ或ハ静止アリ、或ハ變動アリテ、其偏倚セ
 サルヲ、諸生活物ノ動靜ヲ兼備スルト、全ク相異

ナラス、○以上論スル所ニ據レハ、絶^大タ法政ノ別
 無キカ、如シト雖、氏之ヲ熟思スレハ、却テ其別ノ
 判然タルヲ覺フヘシ、且ツ先ツ國法沿革史ト、國
 政治沿革史ノ相殊ナル所以ヲ視ルヘシ、國法沿革
 史トハ何ソ、國家目今ノ存在ヲ得シ所以、且ツ現
 ニ行ル、制度憲法ノ由テ立チシ所以、及ヒ其變
 通改革アリシ跡等ニ限リテ、其他ニ論及セス、又
 國政治沿革史トハ、歴世人君宰輔ノ賢愚明暗、及ヒ
 施政ノ得失當否、或ハ其得失當否ノ為メニ、臣民
 上一般ニ係ル所ノ禍福利害ノ轉變等、都テ國家

古今ノ事蹟ニ就テ論説スルヲ云フ、○國法ヲ整理シテ、之ヲ最モ確明ニナスモノハ、即チ憲法也。ツ、國憲スヘルダト云フベク、又國政ニ氣力ヲ與ヘテ之ヲ著明ニナスモノハ、國家實際ノ統御術（政令レギグ）ト云フヘシ、故ニ政ハ專ラ術ニ屬シテ、學ニ屬セス、○法ハ政ノ基本ニシテ、政治活動ノ規律ヲ定ムルモノナリト雖、又孤立シテ國家ノ用ヲ濟スモノニ非ラサルヤ必セリ、加之時勢ノ變遷ニ從テ、法ニ弊害ノ生スルヲ預防シ、以テ其時勢ニ適應スル良法ヲ立ツルハ、政ノ力ニア

ラサレハ能ハス、故ニ法ハ政ヨリ其呼吸ヲ資取スルモノト云フヘシ、政若シ此呼吸ヲ與フルコト能ハサレハ、法ハ恰モ死體ニ殊ナラス、○政亦然リ、政ハ時勢ノ變遷ニ隨テ、其適宜ノ治ヲ為スモノナリト雖、若シ法ノ以テ之カ限制ヲ為スニ非レハ、其弊ヤ苛酷暴虐ニ陷テ、遂ニ國家ノ敗亡ヲ釀スコト必然ナリ、

第二款

國法私法トレリハト、所以相殊

國法ハ、其根據ヲ國家ニ資ルモノニシテ、即チ公權

ヲ定ムル規律ナリ、私法ハ、其基礎ヲ民人ニ藉ル
 モノニシテ、民人ノ私權ヲ定ムル規律ナリ、○但
 シ又其素性ハ、國法ニ屬ス可キカ如クシテ、却テ
 私法ニ屬スルモノアリ、又私法ニ屬スヘキカ如
 クシテ、却テ國法ニ屬スルモノアリ、譬ヘハ國家
 所有物クセス、ノ法ノ如キ、元來國法ニ屬スヘキカ
 如クシテ、反テ私法ニ屬スルハ何ソヤ、縱令ト國
 家ト雖、土地物件等ヲ有スルノ理ニ於テハ、決
 シテ民人ノ土地物件ヲ有スルノ理ト殊ナラス、
 故ニ之ヲ國家ノ私有ト稱シテ、國家ヲ一ノ私人

ト視做スナリ、又乞願ノ權利ト、民人政府ニ願
 フ可キヲ得ルハ、其權利ト、民人政府ニ願
 事ト、政府ノ檢閱ヲ乞フナク、著書ノ權利等ノ如
 由ト、出版シテ、世ニ公シ、為シ得ルノ權利等ノ如
 キ、民人ノ公權ハ、素ト私法ニ屬ス可キカ如クシ
 テ、却テ國法ニ屬スルハ何ソ、是等ノ權利ハ、元來
 民人ノ國家ニ對シテ行フ可キ權利ニシテ、專ラ
 國法ニ關スル者ナレハナリ、
 是故ニ國法ハ、基礎ヲ國家ニ資リ、定立スル所ニ
 シテ、素ト國家全體ノ為メニ設ルモノナル故、民
 人決シテ毫モ恣マ、ニ取捨スル能ハサル者ナ

リ。○私法ハ之ヲ反シテ、其基礎ヲ民人ノ稟性情
 體、或ハ其意思ニ資リテ、定立スル所ニシテ、素ト
 民人ノ為メニ設ルモノナル故、民人相議シテ、雙
 方一致スルキハ、其權利ヲ取捨變革スルヲ得
 べシ。○去レド私權中ニモ、其行廢國家ノ利害ニ
 關係アルモノ、如キニ至リテハ、民人又決シテ
 恣マ、ニ取捨變革スル能ハサルヲ、固ヨリ論ラ
 須タス。
 國法ニ於テ定ムル所ノ權利ハ、帝ニ公權利タル
 ノミナラス、又兼テ公義務タリ、故ニ都テ其公權

利ヲ有シテ、之ヲ行フノ權アル者ハ、亦必ス之ヲ
 行フノ公義務アリト云フヘシ、譬ヘハ國君ハ、帝
 ニ其臣民ヲ統御スルノ權利アルノミナラス、亦
 共ニ之ヲ統御スルノ義務アリ、法官ハ、帝ニ獄訟
 ノ事ヲ掌ルノ權利アルノミナラス、亦共ニ此事
 ヲ掌ルノ義務アルカ如シ、但シ私法ニ於テ定ム
 ル所ノ權利ニ至テハ然ラス、此權利ヲ行フト、否
 トノ如キハ、之ヲ有スル者ノ意ニ任シテ可ク、
 本来此ニ權利ノ規律、此ノ如ク相異ナル所以ハ、
 殊ニ之ヲ定ムルノ意、相反スルヲ以テナリ、私權

利ハ唯民人ノ為メニ立ル所ニシテ、民人ニ属シ、公權利ハ、國家全體ノ為メニ立ル所ニシテ、專ラ國家全體ニ属ス、是レ即相異ノ因テ生スル所以ナリ、○綴令、公權利ト雖、國家若シ之ヲ止メシト欲セハ、能ク之ヲ廢棄スルノ權アリ、唯其各部局、^{各院}或ハ其職官等ノ權ヲ以テ、之ヲ廢棄セシト欲スルモ、決シテ能ハサルナリ、以上説ク所ニ反シテ、常理ヲ以テ論ス可カラサル者、又許多アリ、今左ニ三例ヲ舉ク、

(第一) 乞願ノ權利、或ハ公事ノ集會ニ加ハル可

キ權利等、民人ノ公權利ナリト雖モ、之ヲ行フト否トニ至リテハ、其意ニ任セテ妨ケ無シ、其故ハ、此公權利ヲ立ツルノ本意、殊ニ民人ニ自由ヲ與フルカ為メニ設ル者ニシテ、專ラ國家全體ノ公利ノ為メニ、建ツルニ非サルヲ以テナリ、

(第二) 代議士ヲ選擇スルノ公權利ハ、其選擇者タル者、故ナク恣マ、ニ之ヲ廢棄スルヲ得サルヲ固ヨリ論無シ、去レ其居民大概選擇ノ權利ヲ得ル所ノ國、或ハ之ニ選擇ノ權利ヲ與フルノ意素ト專ラ國家ノ為メニ已ムヲ得サルニ出テス

レテ、殊ニ人民利益ノ為メニスル所ノ國々ニ於
 テハ、民人此權利ヲ行フト否トハ、其意ニ任セテ
 可ナリ、但シ然ラサルキハ、通常強テ此權利ヲ行
 ハシムルコト當然ナリトス、

(第三)後見ノ權利ハ、私權ナレド、素ト後見人ヲ利
 スルカ為メニ與フル權利ニアラス、專ラ後見ヲ
 受ル者ノ為メニ、許ス權利ナル故、啻ニ後見人ノ
 權利タルノミナラス、亦兼テ其義務ト稱ス可キ
 者ニシテ、決シテ隨意ニ棄ルコト能ハサルナリ、
一ノ例ハ、私權ト雖ヒ棄ル能ハサルノ例ナリ、
 二ノ例ハ、公權ト雖ヒ棄ル能ハサルノ例ナリ、
 上

以上論スルカ如ク、公權利ハ啻ニ權利タルノミ
 ナラス、亦兼テ公義務タリ、故ニ公權利ヲ有スル
 者ハ、一人ニシテ必ス權利義務ノ二事ヲ兼ヌル
 者ナリ、去レド此二事ヲ兼ヌルヲ以テ、決シテ公
 權利ヲ私權利ニ及ハサル者ト為スヘカラス、是
 ニ因テ却テ公權利ノ私權利ニ優ル所ヲ知ルヘ
 シ、何者、公權利ノ啻ニ權利タルノミナラス、亦兼
 テ公義務タル所、自ラ其中ニ道義ノ存スルモノ
 アリテ、私有權利ノ獨リ之ヲ有スル者ノ、利トナ
 ルカ如キニ非レハナリ、○公權利ノ品階愈高

ケレハ之ヲ行ノ公義務亦愈之ト密合シテ決
シテ相離レズ國君ノ權利ヲ以テ其私有ナリト
シテ其行廢國君ノ隨意ニアリト思フハ大ニ國
法ヲ汚辱スルモノト云フヘシ國君ノ權利ハ決
シテ自己ノ權利ニアラス國家ニ對シテ必然行
フヘキ義務タルヲ苟モ忘ルヘカラス
以上説ク所ヲ以テ國法私法ノ別ヲ視ルヘシ但
シ又茲ニ一種此二法ノ中間ニ位スルカ如キモ
ノアリ例ヘハ邑法及ヒ大會社法等ノ如シ去レ
凡是等ノ法實ニ此中間ニ位シテ獨立スルモノ

ニアラス會社法ト總稱スル者ノ如キハ或ハ私
法ニ屬スルアリ或ハ國法ニ屬スルアリ又ハ此
二法相混合スル者アリテ一樣ナラス

第三款 前款舉ル所ノ外仍國法ノ關涉

(第一)列國法萬國公法ト譯ス又ハ列國相關係ス
ル所ノ規律ヲ定ムルモノニシテ其干涉スル所
僅ニ一國ニ止マラス○列國ノ相關係スルハ猶
國內各民ノ相關係スルト其理同一ナルカ如シ
去レ凡其際ニ行ハル所ノ法ハ決シテ國內ノ

私法ヲ推廣シテ、直チニ列國ノ際ニ及ホシタル者ニハアラス、抑此法タルヤ、宇内ノ人類ヲ一體ト視做シテ、萬國ノ全體ニ及ホス可キモノナルカ故ニ、其理ニ至テハ、帝ニ國法ノ國家全體ニ關涉スルカ如キノミナラス、更ニ大ナル公權ヲ定ムルモノト謂フヘシ、○設令宇内萬國ヲ統一スル所ノ大政府アリテ、萬國ニ於テ普ク遵奉スヘキ憲法律令ヲ制定セバ、列國法ナル者ハ、乃チ變シテ宇内國法トスルト為ルヘシ、去レテ未嘗テ此ノ如キ大政府大憲法アラス、故ニ列國法、

未タ實ニ十全完備ノ地位ニ至ラサルナリ、是故ニ今世ニ在リテハ、國法ハ、既ニ十全完備ノモノト稱ス可ク、列國法ハ、未タ十全完備セサルモノトシテ、其別ヲ立テ、以テ國法學ニ於テ、國家ヲ一個ノ公體ト視做シテ、其法ヲ論シ、而テ列國相關係スル所ノ法ノ如キハ、姑ク之ヲ列國法ノ學ニ讓ラサルヲ得ス、

(第二)之ニ次テ、國法ト相分ル、者ハ、神法ニキルヘシ、
 一、我神教宗徒ナリ、國事ト神事ノ相分ル、其端ハ、既ニ往古ニ胚胎セシト雖、實ニ全ク相分レ

レハ、甚ク晚シ、昔者羅馬國ニテモ、仍神法クルム、
 ラ以テ國法リユクム、^{プロマ}ブノ一部分ト為シタリ、
 基督^{キリスト}教世ニ行ハル、ニ及ヒ、國事ト神事ト始テ
 相分レテ、各個ノ者ト成ルニ至レリ、抑基督ノ神
 教タルヤ、其基ヲ國家ニ資ラス、自ラ相離レテ存
 在スルモノナルカ故ニ、其法モ亦近今ノ國法ト
 全ク相分別ス、○去レテ神事ノ法、全ク國家ニ關
 係セサルヲ能ハス、且ツ、神事國事相關涉スル所
 ノ規律ハ、素其基ヲ國家ニ資リテ定ムルカ故ニ、
 神法亦必ス國法ノ部屬タラサルヲ得ス、

第三 治罪法、^{プロト}ト^ロト^スフ、及ヒ刑法^レス^トラ^フハ、實ニ
 全ク國法ニ屬シ、訴訟法^{プロ}ヒ^ルモ亦大概之ニ
 屬ス、○治罪訴訟ノ二法ハ、國家其臣民ヲ保護シ
 テ、之レカ為メニ其權利ノ枉害セラル、ヲ防ク
 ニ在リ、又刑法ニ至テハ、其刑ヲ施スノ本旨タル
 ヤ、獨リ權利ノ枉害ヲ受ケタル民人ヲ保護シテ、
 之ヲ防ク為メノミナラス、素ト其罪科ヲ以テ、國
 家全體ノ安寧ヲ害シ、秩序ヲ紊ルカ故ニ、全ク之
 ヲ防クニ在リ、是レ蓋シ近世刑法ノ大ニ開明進
 歩シタル所以ナリ、

去レテ訴訟法及ヒ刑法ハ、國法中ヨリ分派シテ、之ヲ別種獨立ノモノト為サ、ルヲ得ス、蓋シ然ラサルヲ得サル所以ニ理アリ、其一ハ、此二法素ト私法ト關係密合スルモノニシテ、殊ニ訴訟法ハ、實ニ唯私法ヲ保護シテ、私權利ノ枉害ヲ防遮スル所以ノモノ、且、刑法モ亦大概然ル所以ノ者ナルニ由リ、又其一ハ、此二法關涉スル所ノ範圍頗ル廣大ナルノミナラス、其主掌スル所ノ事理亦切要ニシテ、偏ニ特立專殊ヲ要スレハナリ、

第四款

國法汎論、アタルゲツマイ子ス、及ヒ國法各論、
ターソンデフレ、ス、

各殊ノ國ニ就テ、其國法ヲ論スルモノヲ、國法各論ト云フ、例ヘハ羅馬民主國ノ國法論、英國ノ國法論、或ハ獨乙列國ノ國法論ト云フカ如シ、又各殊ノ國法ニ著意セズ、唯汎ク國家タルヘキ者ノ法ヲ論スルヲ、國法汎論ト云フ、是故ニ國法各論ハ、單ニ其國ノ制度風俗ニ基キ、國法汎論ハ、專ラ一般ノ人性、及ヒ世界ノ公理ニ基イテ論スルモノナリ、

嘗テ國法ヲ汎論スル所ノ學士ヲ視ルニ、動モス
 レハ單ニ性理ヲ以テ國法ヲ説ク、蓋シ其意謂ヘ
 ラク、唯理是レ窮ムレハ、國法ノ學茲ニ成ルヘシ
 ト、是ニ於テ所謂探理國法論、タロソレヒセト、ス
 天理國法論、スタイルツルフト、等ノ學派起レリ、而
 シテ此學派現立國法論、ポシチヘス、スタイルツ
 セル國法ヲ及ヒ探蹟國法論、ヒストリヤト、探蹟
 古今沿革ノ蹟ヲ探ト、相表裏ス、探蹟
 余ヲ以テ之ヲ觀レハ、是等諸派ノ所見ハ、皆共ニ
 偏倚シテ其當ヲ得ス、凡ソ國家ノ事ハ、單ニ性理

ヲ以テ論スヘカラス、又單ニ古今ノ沿革事蹟ヲ
 以テ論スヘカラス、常ニ性理ト沿革事蹟トノ二
 事上ニ注目著意シ、之ニ基イテ論述スレハ甚タ
 可ナリ、故ニ汎論各論共ニ、決シテ此二事ノ一ヲ
 缺クヘカラス、
 宇内一般ノ民彞通俗ハ、必ス各國各種ノ民性風
 俗ニ先スルテ、理ノ當然ナルカ如ク、國法汎論ハ、
 必ス國法各論ニ先スルテ、亦理ノ當然タリ、○國
 法汎論ノ本旨トスル所ハ、專テ各國ニテ撰定ス
 ヘキ、國法ノ根據トナルヘキ、本理ヲ查定スルニ

在リ、此本理既ニ明カナレハ、時處ノ宜シキニ應
シテ、千狀萬態、皆其用ヲ為スヘシ、○汎論ニ於テ
着眼スヘキ、古今ノ沿革事蹟ハ、屢々數國ノ沿革
事蹟ニ止マラス、宇内萬國古今大沿革ノ事蹟ナ
レハ、學者タル者、能ク之ニ注意スルキハ、理ノ宜
シク取用スヘキモノト、宜シク取用スヘカラサ
ルモノトヲ辨識シ、且ツ現ニ實際ニ用フヘキ器
材ノ自ラ此事蹟中ニ充滿スルヲ領解シ得可シ、
然ルニ單ニ性理ヲ論スルノ徒ハ、決シテ之ヲ領
解スルヲ能ハス、○古今萬國ノ事蹟ニ著眼注意

シテ、之ヲ探討スルキハ、凡、開闢渾沌ノ太古ヨリ、
漸ク變遷沿革シテ以テ今日ノ文明開化ヲ致セ
シ所以、及ヒ其際ニ當リ、時論屢變化シ、國體制度
亦屢變革セシ所以ヲ通知シ、且ツ各國列邦、今日
ノ開明ヲ裨補セシト、否トヲ知ルヲ、甚難キニア
ラス、
去レ氏吾輩國家學ヲ論究スルノ本旨タルヤ、專
ラ古今萬國ノ變遷沿革ヲ示サントニハアラス、
唯汎ク今時ニ適應スル所ノ國法ヲ論究スルニ
在リ、故ニ古今歷世ノ國體法制ヲ論究スルハ、唯

專ラ今日ノ參考ニ備ヘ、以テ古今ノ沿革ヲ視テ、
 目今ノ進歩ヲ示サンコトヲ欲スルニ在ルノミ、○
 古時隆盛ノ諸大國大ニ今日ノ開化文明ヲ促シ、
 以テ國法ノ沿革進歩ヲ裨ケシモノ少カラス、且
 ツ其中ニ就テ、自ラ淺深ノ差等アリ、例ヘハ往古
 アリヤ人種又インド、セルマニ、子ト稱ス、
 按、亞細亞ノ西部
 ヲヨリ、歐羅巴全州ニ古今ノ變遷沿革ハ、專ラ今
 日國事開明ノ裨益トナリシ者ニシテ、猶セム人
 種按、亞細亞ノ西方ニ蔓行セル、
 高加索人種ノ一
 種ニシテ、今ノ亞細亞土耳其、
 或ハ、亞刺比亞邊ニ
 住ナリ、ノ古今變遷沿革、專ラ神教進歩ノ裨益ト

ナリシカコトニ、サレバアリヤ人種ノ實ニ太古
 ノ野鄙陋劣ナル國體ヲ一洗シテ、漸ク文明優隆
 ノ國體ト為セシハ、此人種始テ歐羅巴ニ蔓行セ
 ン、以後ノコトナリ、○此人種中ニ就テ、太古ニ在テ
 ハ希臘羅馬ノ二國中、古按、紀元四百七十六年ヨ
 り、千四百九十二年ニ至
 明應元年即我雄略天皇二十六年ヨリニ在テハ日
 耳漫國ハ、今仍舊國名、但シ英語ト云テ、ノ文明彬々
 タル、殊ニ他邦ニ卓絶シタリ、故ニ今時歐洲各國
 文明優隆ノ國體ヲ備シハ、全ク此三國ノ開明ヲ
 集成セシモノト云フヘシ、就中英國ノ如キハ、庶

民ニ至ル迄、此三國ノ開明ヲ得テ、知識益闢久大
 イニ國事ノ進歩ヲ裨補シ、之ニ次テ佛國亦頗ル
 文明ヲ極メテ、國事ノ進歩ヲ增セシテ、甚少カラ
 ス、○亞米利加洲國事ノ開明ハ、基ヲ歐洲ニ資ル
 ト雖、殊ニ北亞米利加ノ如キハ、亦能ク自ラ進
 歩セシ者ト云フヘシ、
 是故ニ吾輩論究スル所ノ國法汎論ノ學ハ、元來
 今時文明世界ノ通論公理ヲ示シ、以テ時處ノ宜
 キニ隨テ、千狀萬態、能ク其用ヲ為スヘキ基本ヲ
 開ク者ナレハ、徒ニ紙上ノ空談ト視做スヘカラ

ス、現ニ今日ノ實際上ニ施シテ、其効ヲ奏スル
 頗ル少シトセス、唯各國民性習俗ノ各異ナルカ
 為メニ、其奏効ノ形狀、亦自ラ差異アルノミ、

〔附論〕亞立斯度德爾（按希臘ノ碩學、紀元前三百

二年ニガ其著書中ニ、通法各法ノ別ヲ立テタ
 リト雖、吾輩論スル所ノ國法汎論國法各論
 トハ、全ク其歸ヲ異ニセリ、其通法ト稱スル者
 ハ、絶エテ國家ニ著意セズ、唯天理自然ニ生ス
 ル所ノ公法ヲ云ヒ、又各法ト稱スルモノハ、法
 書ニ記録スルトセザルトニ論テ、各國其宜

ギニ隨テ制立スル所ノ國法ヲ云ス

第五款 國法ノ淵源、スクエルツレン、デス、

甲 憲法、ダス、ゲ

國法ヲ認知シ易カラシメンガ為メニ、詳明ニ記載シテ、之ニ至壯至大ノ形狀ヲ與ヘシ者ヲ稱シテ、憲法ト云ス、是故ニ國法ナル者ハ、其形狀ヲ得テ、憲法トナルニ及ヒ、始テ確乎著明ナルヲ得ルナリ、○國家ハ、憲法アリテ、始メテ其全體ノ規制定マルヲ得、以テ能ク其權利ヲ保存スルヲ得ル

ナリ、故ニ能ク其權利ヲ確明ニスルモノハ、獨リ憲法ノミ、

是故ニ真ノ憲法タル者ハ、必ス國家ノ外、能ク之ヲ示令スル者アルナシ、但シ又其部局等各、自局ノ為メニ制立シ、自己ノ權ヲ以テ、示令スル規律ノ如キモ、亦同シク憲法ト稱スルヲ得可シ、例ヘハ、王室ノ戚族憲法、ハミリオンゲキツ、或ハ一家憲法、ハダウスタキ、デ及ヒ各府各邑ノ法度、ストト規則、オールド等ノ如シ、○又國家ヨリ示ス所ノ布令トヘル、オールド、ノ如キモ、是等諸法ト、其等位ヲ異

ニセス、①

〔按〕國家出ス處ノ布令ナレハ、是等諸法ノ上ニ立ツヘキカ如シト雖、凡必竟此布令ナル者ハ、政府立法府ト議シテ制定スル者ニアラス、政府國憲許ス所ノ範圍中ニ於テ自ラ制定スル所ノモノナレハナリ、

國家其國法ヲ制定スルノ權ヲ以テ私法ヲ制定スルノ權ト全ク同視ゾヘカラス、國家其國法ヲ制定スルハ、即チ自己分上ノ事ヲナスモノニシテ、其處分ノ自在ナル、私法ヲ制定スルト自ラ異

ナリ、蓋シ國家ノ私法ヲ制定スルハ、自己ノ事ヲナスニ非ス、私人ノ為メニ施設スル者ナリ、私人ノ交際ニ至リテハ、事端涯際ナシ、而メ每事必スシモ國家ノ管スル所ニアラス、是故ニ其規律ヲ定ムルモ、亦全ク自在ナルヲ得サルナリ、○私人ハ元來國家ノカラ借リテ、始メテ私人トナルニ非ス、私人ハ、素ヨリ私人ナリ、故ニ其權利ニ至テモ、亦國家ノカラ借リテ、始メテ立ツニ非ラス、本來固有スル所ノ權利ナリ、唯此固有スル所ノ權利、國家ノカラ借リテ、始メテ全備スルヲ得、且ツ

其保護ニヨリテ、確固ナルヲ得シノミ、故ニ私法
 上、國家ノ殊ニ務ムヘキハ、民人天然有スル所ノ
 權利、及ヒ時世ノ沿革ニヨリテ得シ所ノ權利ヲ
 辨識シテ、之ヲ調理スルニ在リテ、決シテ恣ニ之
 ヲ制定スルニ在ラス、○此理ニ戻ルカ為ニ、生ス
 ル所ノ利害ハ、末篇ニ於テ詳論スヘシ、

第六款 同上

乙 國約、スタリトラリヘ

現ニ行ハル、所ノ國法ヲ、互相約束ヲ以テ認識

或ハ編成ニ、又ハ改革スル等ノ事、屢之アリ、之
 ヲ稱ソ國約ト云ク、○列國、此約束ヲ舉行スレハ、
 真ノ國約ト稱スヘクシテ、即列國法ノ一種ヲ生
 ス、又一國內ニ於テモ、國事ニ預ルヘキ權利ヲ有
 スル所ノ各黨、互ヒニ此ノ如キ約束ヲ為スコトア
 リ、例ヘハ羅馬ノパトリール（按古時羅馬ノ貴族ト、プレ
 ース（按同上）ト相結ヒニ約束、或ハ又中古ニ在リ
 テハ、國君其下諸等ノ臣民ト、互ニ為セニ約束ノ
 如ク、
 國約ノ憲法ト相類似スル所以ハ、其條規ノ制ニ

至テモ、亦憲法條規ノ如ク、之ヲ明記シ、且、必ス全
權者アリテ、之ヲ示令スルニ在リ、但シ又憲法ト
大ニ相異ナル所アリ、元來憲法ヲ制定スルハ、國
家ノ各部局、真ニ同心一體トナリテ、之ヲ為スト
雖、國約ニ至リテハ、然ラス、凡ソ國事ニ預ル所
ノ各部局、皆均ニク獨立ノ全權アリテ、各其言ハ
シト欲スル所ヲ闡述シ、然後ニ其論ヲ合シテ之
ヲ一決ス、○是故ニ憲法ノ體裁ト、國約ノ體裁ヲ
比較シテ、國家ノ為メニ其可否ヲ考ルハ、憲法
體裁ノ大ニ國家ニ益アルヲ明カナリ、何者、既ニ

論スルカ如ク、憲法ノ體裁タル、必ス國家全ク一
體トナリテ、其欲スル所ヲ述ルモノニシテ、各部
局相睽離スル所ナケレハナリ、○唯列國相約シ
テ立ツル所ノ規律ニ至リテハ、素共ニ合立スル
所ノ立法府ナキヲ以テ、必ス國約ノ體裁ヲ用ヒ
サルヲ得サルナリ、
英國ニ於テ、國王ト、上院下院相共ニ協力同心シ
テ、憲法ヲ制定スルカ如ク、真ニ公正ノ國憲アリ
テ、憲法制定ノ一決シテ一君或ハ一議局等ノ意
ニ出テス、必ス立法諸部局ノ協力同心ニ由ル所

ノ各國ニ於テハ、絶テ國約ノ意アルヲナシ、然ルニ動モスレハ協力同心ヲ誤認シテ、合論一決ト混スル者アリ、別ヲ知ラスト云フヘシ、○巴カ門ハ議事院ト云フ、或定制スル所ノ憲法ノ如キハ、國事ニ預ルヘキ、獨立全權ノ諸黨、互ニ其欲スル所ヲ述ヘテ、之ヲ決定スル所ノ國約ト、相距ル霄壤ナリ、抑、巴カ門ノ各部ハ、決シテ獨立シテ制法ノ權ヲ有スル者ニアラス、君主兩院相合シ、協力同心、共ニ一體トナリテ、始メテ此權ヲ得ル者ナリ、故ニ憲法ナル者ハ、絶テ一體ノ意ヲ離ル、一ナ

シ、○是故ニ國內ニ於テ、國法ヲ立ルニ就テ、國約ノ體裁ヲ用ス可ラサル所以ハ、殊ニ此體裁、國家ノ勢カヲ分離シテ、其一體タルヲ損シ、國家全體ノ法ヲ舉テ、其各部ノ欲スル所ニ任スニ在リ、之ヲ要スルニ、各部ヲ先キニシ、全體ヲ後ニシテ、大ニ前後輕重ノ權ヲ誤ルニ在リ、○古時日耳曼各國ノ國法タル、大體國約ノ體裁ヲ用ヒテ、國家ノ一體タル所以ヲ失ヒ、是ニ由テ大ニ國家ノ活動力ヲ減損シ、且ツ國家全體ノ公利公安ヲ害セシ、亦少カラサリシカ、國家ノ開明漸ク増進ス

ルニ隨テ、次第ニ國約ノ體裁ヲ廢シテ、憲法ノ體裁ヲ用ヒ、或ハ全ク廢棄スル能ハサルモ、大ニ之ヲ變革シテ、殆ント憲法ノ體裁ニ類似スル者トナセシ事ハ、其史ニ載テ瞭然タリ、

○〔按〕此條ノ意解シ難キニ似タリト雖、先ツ國約ヲ立ルノ專志ト、憲法ヲ立ルノ專志ト、其異ナル所以ヲ知レハ、隨テ憲法國約ノ異ナル所以モ、亦自ラ明亮ナリ、蓋シ國約ヲ立ルニ於テハ、各部局必ス先ツ自局ノ利害ヲ謀リテ、而後ニ全局ノ利害ニ及ボスト雖

凡、憲法ヲ立ルニ至リテハ、詢謀常ニ全局ノ利害ヲ主トシテ、敢テ專ラ各部局ノ利害ヲ顧ルコナレ、是レ即チ合論一決ト、協力同心ノ別アル所以ナリ、

〔附論〕國約ハ、永世不變ノ者ナリト論スル者アリ、甚タ誤ルト謂フヘシ、凡ソ人世ノ事、古今時代ノ轉變アルハ、論ヲ俟タスレテ、人ノ能ク知ル所ナリ、國家ノ事ト雖、亦決レテ此理ヲ免ル、一能ハス、古來未タ嘗テ不變不壞ノ國約アラサリレド、猶不變不壞ノ憲法アラサリレ

カ如レ、法律若シ真ニ天理ノ當然ノミニ出レ
 ハ、全ク不變不壞ノ者タルヘケレト素ト古今
 萬國、轉遷變化スル所ノ人事ヲ定斷スル規律
 ナレハ、亦宜シク時ニ隨テ、轉遷變化スヘキト、
 固ヨリ論ナクシテ、即是レ天理ノ當然ナリ、唯
 憲法ノ體裁ヲ用フルト、國約ノ體裁ヲ用フル
 トノ差ヒニ由テ、此理ノ異ナルト、絶ヘテアラ
 サルナリ、

第七款 同上

正シク憲法ニ明記スル者ノ外、尚官民共ニ諸公
 事ニ於テ、其心中、事理當然トシテ、現ニ安シ行フ
 所ノ法少カラス、此法タルヤ、元來民心ノ默許ヲ
 經ル既ニ久シク、遂ニ慣用ノ法トナリテ、公然之
 ヲ行フニ至リシヨリ、全ク當然ノ法タルヲ得テ、
 乃チナチオナトレス、レフト按此法ニ卷第三款ニ
参看ストナリシ者是レナリ、
 羅馬ノ國法中、殊ニ緊要トスヘキ條規ハ、大概憲
 法、或ハ國約ヲ以テ、確定明記セシモノニアラス、

從來其國民ノ間、理ノ當然ナル所ニ適應スル良
好ノ習慣ヨリ出テ、自ラ法トナリタルモノ多
シ、且ツ中古各國ノ國法ニ至リテモ、亦大抵慣用
ニ出ルモノ多ク、現今英國ノ國法モ、亦憲法上ニ
確定明記セズシテ、唯慣用ヨリ自ラ法トナリシ
モノ居多ナリ、其他各國共ニ多少ノ慣用法アラ
サルハナシ、
故ニ慣用法ハ、真ニ國法ノ一淵源ニシテ、決シテ
輕忽ニ考フヘカラサルハ、固ヨリ論ナシ、但シ此
法ヲ以テ、憲法ニ比較シテ、其得失如何ヲ考フル

キハ、憲法ノ確實明亮ナルニハ如カス、蓋シ慣用
法ハ、預メ理非得失ヲ論シテ、定メタル者ニアラ
ズシテ、唯自然ニ出ル者多シト雖、憲法ハ然ラ
ズ、必ス理ノ當然ニ由テ、論定セシ者ナレハナリ、
去レテ又慣用法ノ憲法ニ優ル所ナキニアラス、
慣用法ハ、素勢ノ自然ニ出ルカ故ニ、勢轉變スレ
ハ、法モ亦隨テ轉變シテ、自ラ時ノ宜シキニ適應
スル、憲法ヲ改革シテ、時宜ニ適セシムルハ、難
キカ如クナラス、
所謂勢ナルモノハ、自然實際上ニ生スルモノニ

レテ、且ツ人性賦稟スル所秉彝ノ心亦隨テ之ヲ
 認許スル者ナリ、故ニ民心ニ於テモ遂ニ默許シ
 テ、之ヲ法トスルナリ、
 法ナル者ハ、元來他方ヨリ來ル者ニアラス、又他
 方ニ移スヘキ者ニモアラス、唯現存スル所ノ景
 況、及ヒ方向、即是レナリ、故ニ國家現存ノ景況、及
 ヒ方向、即是レ國法ナリ、

第八款 同上

丁 論究、ギ、ヤ、フ、ト、

國法論究ノ本旨タルヤ、專ラ新法ヲ生殖スルニ
 在ラス、唯專ラ現存ノ法ヲ辨知スルニ在リ、是故
 ニ、論究ハ實ニ法ノ淵源ト稱スルニ足ラス、通常
 唯法ノ淵源ヲ探討スルノミ、
 去レテ論究ナル者、唯法ノ淵源ヲ探討スルノミ
 ニ止マラス、時アリテ亦之ヲ産殖スルヲアリ、故
 ニ亦法ノ淵源トナルヲアリ、而シテ其淵源タル
 ニ二様アリ、
 (其一) 論究ハ、以上三淵源（憲法、國約、及ヒ、云、ノ如ク、
 唯法トナルヘキ器材ヲ、湊合スルノミニアラス、

亦此器材ヲ精鍊シテ之ニ其善美ヲ與ヘ、以テ大ニ現存ノ法ヲ増大スルコト儘コレアリ、譬ヘハ、立法者、法ヲ制立スル始ニ方リ、或ハ之ヨリ他日將サニ全法上ニ關係スル、利害得失ノ生セントスルヲ、窮盡スル能ハサルコトアレド、却テ論究者ハ、其論究ニ由テ之ヲ探求スルコト、多次之アルカ如シ、○其他又慣用法ヲ論究シテ、其理ヲ明亮ニナシ、且ツ之ニ由テ、遂ニ慣用法ヲ確定明記シテ、憲法トナスノ基ヲ開クコトアリ、是レ皆論究ノ功ナリ、

〔其二〕第二ハ、更ニ緊要ナル者ニシテ、即チ法理ノ論究ナリ、法理ノ論究ナル者ハ、敢テ現存ノ法ヲ講スルニアラス、故ニ直ニ現存ノ法ニ關係スルコトナク、專ラ理ノ當サニ然ルヘキト、否トニ就テ、講論研究スルヲ云フ、○此ノ如キ法理、次第ニ民心ニ浸漸シ、自ラ其認許ヲ得、遂ニ國家ノ採用ヲ以テ、其保護ヲ受ルニ至ラサレハ、未タ嘗テ真法トナルコト能ハス、○憲法ノ制立ニヨラス、唯此ノ如キ法理ノ論究ニヨリテ、現存ノ國法ヲ増大セシ、多次コレアリキ、是レ即チ論究ナル者、國法ノ

國法論 卷一 部

一淵源トナリテ、他三淵源ト並列スルヲ得ル所
以ナリ。
讀者、論究ノ字ヲ誤解シテ、單ニ講學ノトト為ス
ヘカラス、又書籍上ノ研究ノミト為スヘカラス、
凡ノ當路者、今日國家政治上ノ論議ニ方リテ、其
說ヲ演述シテ之ヲ示シ、以テ衆心ヲシテ之ニ敬
服セシメ、將軍ノ戰場ニ於テ、日々兵士ト共ニ遵
守スヘキ規律ヲ示シ、以テ兵卒ノ疑ヲ解テ、其一
定ノ方向ヲ與ヘ、法官ノ獄訟ヲ掌リ、能ク理非曲
直ヲ明カニシテ、其事ヲ裁決シ、以テ衆人ヲシテ

惑ヲ解ナカラス、又新聞著者ノ、己カ論說ヲ陳
述シテ、遂ニ能ク輿論ノ方向ヲ一ニシ、且、未タ曾
テ衆人ノ辨知スル能ハサル理義ヲ明晰ニシ、遂
ニ國家ヲシテ、其理義ヲ採リテ、以テ國法ノ條規
ヲ改増セシムル等、其他此ノ如キノ類、皆能ク其
論究ヲ以テ、現存ノ國法ヲ増大スト云フヘシ、○
但シ此ノ如キ論究ヲ以テ、真ニ國法増大ノ裨益
ヲナスハ、殊ニ當路者ニ在リトス、古今王侯輔弼、
賢明ノ譽ヲ得ル所以ノモノハ、決シテ威權ヲ擴
張シ、或ハ憲法ヲ制立シテ、國法ヲ増大セシ功業

國法論 卷一 部

ニ因ルニナラス、唯其論究ノ力ニ因テ、遂ニ能ク
臣民ヲ甘服セシメ、以テ其國法ヲ増大スルノ功
業ニ因ルナリ
論究ニヨリテ起立スル所ノ法ハ、能ク慣用法ニ
類似スル所アリ、即チ論究法ノ條規ハ、彼ノ憲法
或ハ國約ノ條規ノ如ク明記シテ、實ニ政府コリ
示令セシ者ニナラス、唯全ク輿論ノ認許ニヨリ
テ、始メテ能ク行ハル、者ニシテ、猶慣用法ノ明
記スルヲナク、唯一般ノ慣用ニ由テ行ハル、カ
如シ、故ニ論究法ハ、真ニ確定スルモノニ非スシ

テ、自ラ轉遷變化ヲ免ルル能ハス、去レバ又時
勢ニ隨テ活用スルノ大利アリ、○但シ又其慣用
法ト相異ナル所以アリ、即チ慣用法ノ起立ハ、專
ラ從來ノ習慣ヨリ出テ一般ノ民情識ヲス知ラ
ス、之ヲ法トナスニアリト雖、論究法ニ至テハ、
專ラ一般ノ知識開進スルニ隨テ、其理義ノ協否
ヲ辨別シテ、然後ニ始メテ認許スルヨリ起立ス
ルモノナリ、故ニ論究法ノ慣用法ト相異ナル所
以ハ、宛モ慣用法ト憲法ト相異ナルノ理ニ同シ
所謂性法、ナット、即チ良知法ト、
現ニ定立セル

國法凡論 卷之三 三

法ニハアラス、自然ノ人論ノ天賦ニ具備スルノ可否
得失ニ就テハ、古來議論紛然トノ一定セサレ
以上ノ論ニ由テ之ヲ考フルハ、其理自ラ明瞭
ナルヘシ、此法タル、譬ヘハ普ラト土（註）希臘有名紀
元前四百二十八年ニ死ス、レヴブキ、ミト、イ
レ、エフテ（註）普拉土現ニ因テ自ラ民主政體
ノ法ヲ守護スルヲ論ス、置ノ如ク、唯學者ノ論究
上ノミニ在テ、未タ一般ノ識得ニヨリテ國家ノ
法トナラサル間ハ、決シテ真法トナスニ足ラズ
元來天賦ノ人性ニ出ル法論ハ、基ヲ天理ニ資ル

カ故ニ、都テ今日ニ施シテ、大ニ宜シキ所以ヲ説
ク者アレバ、未タ此理ヲ以テ、實ニ法タルニ足ル
ト、為スヘカラス、都テ論究ノミニ由テ、法ノ生ス
ル者ニハアラサルナリ、○性法學ニ於テ論究ス
ル所ノ法、一般ノ識得ニ由テ、遂ニ認許ヲ得ルニ
至レハ、始メテ真法タルヲ得可シ、故ニ始メテ法
ヲ産出スル者ハ論究ニシテ、嗣後能ク之ニ兼實
ヲ與フルモノハ、一般ノ識得ナリト云フヘシ、
既ニ羅馬ノ私法ノ如キモ、過半ハ論究ヨリ生セ
シ者ニシテ、一二緊要ノ規律スラ、尚性法ヨリ取

國法凡論 卷之三 三

リテ設ケタルモノナリ、譬へハ過誤罪ハグルカ
 ト、羅句語ニテノ法ノ如キハ、素ト人ノ通性ヲ論
 究シテ、之ニ基ツキ、設立セシ者ナリ、○民人ノ識
 得、道ニ於テ緊要ナル事ヲ認メテ、法ニ於テモ亦
 緊要トナシ、國家亦此識得ニヨリテ生シタル法
 ヲ取りテ、之ヲ國法トナスニ至レハ、道ト法ト相
 離レサルカ故ニ、真ニ貴重スヘキ國法、始メテ立
 ヲト云フヘシ、是ヲ以テ實ニ治平ノ道ニ長シタ
 ル當路者ハ、執ニヨリテ障碍セラレ、一有ラサ
 レハ、必ス勉メテ性法ニ基キ、其國法ヲ立ルヲ本

旨トナス、

〔附論第二〕性法ノ

トニ就テ、

パウルス

年按紀元十

小亞細亞ニテ死刑ニ行ハレタリ、
 年ニ羅馬ニテ死刑ニ行ハレタリ、
 曰ク、天神ハイデ按未タ真神ヲ知ラサル國民
 教者ヲ奉セサ、ノ精神ニモ、尚必法ヲ銘ス、故ニ其
 知識ニ因リテ、自ラ之ヲ悟リ得ルナリト、○メ
 ランクトン按獨乙人、一千四百九十七年ニモ
 亦其著書中ニ、現立法ハ、性法ヲ精密ニ確定ス
 ルモノナリ、故ニ天性國法按ナキツレルフト按即
 性國法トハ、國法、私法中等ノ國法ナリ、天ヲ精密ニ確

定スルモノハ、即憲法、國約、慣用法、及ヒ論究法
ナリト、説ケリ、

同上第二始テ法ノ生産セシ時ヲ索メ、且シ其
生産ヲ助ケシ諸原因ヲ探討スルハ、儘能クシ
難キヲアリテ、總テ天造物ノ始メテ生産セシ
時ヲ測ルニ異ナラス、去レモ此法實ニ國家ノ
認許ヲ得、始メテ真法トナリテ、明瞭確實ナル
ニ及ヒテハ、之ヲ知ルノ難キニアラス、

第九款 國法及ヒ國家假法、スルベシトリ

私法ニ於テ所有、アイゲント假所有、ベシク別有
ルカ如ク、國法ニ於テモ亦、真ノ國法ト、國家假法
トノ別有リ、何ヲカ假法ト云、即未タ法ノ名ヲ得
ス、唯勢ニ因テ自カラ國家今日ノ實際上ニ生ス
ル規律アリ、之ヲ名ケテ假法ト云ヒ、以テ真ノ國
法ト分ツナリ、
假法モ亦國法學ニ於テ敬重スヘキ者ナリ、然ル
所以ニ二理アリ、第一ニハ、假法ハ現ニ實際上ニ
生スルカ故ニ、必ス能ク之ヲ保護シテ、其妨害ヲ
預防セサル可ラス、第二ニハ、假法ハ自ラ一真法

國法論 卷之三 法律部

ノ萌芽ニシテ、國法期年（按下文ニシテ）經レハ、遂ニ
真法トナル者ナレハナリ、○假法ノ國法ニ於ケ
ルヤ、假所有ノ私法ニ於ルヨリモ、其關係スル所
更ニ大ナリ、何者、假法ノ遂ニ轉シテ真法トナル
ハ、假所有ノ遂ニ轉シテ真所有トナルヨリモ猶
容易ク、且、其真法トナルノ氣勢モ、亦駸々トシテ
更ニ大ナレハナリ、○若シ私法ヲ犯シ、妄ニ人ノ
所有ヲ妨害スル者アルニ方リテハ、國家ノ法院
能ク妨害セラル、者ヲ保護スルヲ以テ、其害ヲ
防止スル難ラスト雖、若シ國法許サ、ル所ノ

處置ヲ以テ、公權ヲ犯ス者アルキハ、國家ノ威力
ト雖、或ハ容易ク之ヲ防制スル能ハサルコト
リ、斯難易ノ差異アルカ為ニ、假所有ノ真所有ニ
轉スルト、假法ノ真法ニ轉スルトノ、難易遲速モ
亦自ラ差異ナキ能ハス、去レ此難易遲速ノ差異、
決シテ唯此ノ如キ勢ニノミ由ルニアラス、殊ニ
國法私法ノ本性、自ラ相異ナルニ由ルナリ、
茲ニ人アリ、自ラ許シ、此事即私法ナリトシテ之
ヲ行フト雖、他人敢テ之ヲ認許セサルハ、理ノ
當然ニシテ、當ニ私法ニ於テ然ルノミナラス、國

國法論 卷之三 法律部

法ニ於ケルモ亦然リ、故ニ假法ノ轉シテ真法トナルニハ、其事必ス先、理義ノ二源ニ基カサルヘカラス、○今其本性ノ相異ナル所以ヲ論セシニ、曾テ我ニ屬セサル物ヲ取リテ、之ヲ我有ト為サントスルニ方リテ、此物本来所有主ナケレハ論ナシ、若シ他人曾テ此物ヲ有スルキハ、即チ我ト同等ナル人ノ權利ヲ犯スノ理アリ、然ルニ假法ノ轉シテ真法トナルハ、之ニ異ナリ、抑國家ノ事體タル時ノ流行ニ隨テ、漸ク轉變ヲ生シ、此勢中假法自ラ生シ、國家ノ一體内ニ於テ、現ニ今日ノ

實際上ニ行ハル、カ故ニ、之ヲ防遮セント欲スル者自ラ少ク、遂ニ國家自ラ之ヲ認許シテ、以テ法トナスニ至ル、是即チ假法假所有ノ轉シテ、真法真所有トナルニ、難易遲速ノ差異アル所以ナリ ○

○〔按〕此章ハ、假法假所有ノ轉シテ、真法真所有トナルニ、難易遲速ノ差異アルハ、唯勢ノ然ラシムルノミニアラス、亦專ラ國法私法ノ本性相異ナルニ因ル所以ヲ論スル者ニシテ、頗ル解シ難キニ似タリ、去レ氏熟讀玩味シテ、

其本性ノ異ル所以ヲ究レハ、亦解シ難キニ
 非ス、畢竟私法ハ、民人相對スル所ノ法ナレ
 氏、國法ハ、全ク國家一體内ノ法ナルカ故ニ、
 此二法ノ本性相異ナレリト云フナリ、
 右論スル所ヲ以テ、左ニ舉ル所ノ二派ノ僻論ト
 參考スルキハ、上ニ論スル所更ニ明瞭ヲ得、兼テ
 其中正ヲ得ル所以ヲモ知ルニ足ル、
 第一派成功事業ノ學派ニテオリ、ハ、デル、ソ、コ、ム、グ、ナ
 ス、ナル者アリ、此學派ハ、特ニ實際ノ轉遷變化ニ
 因ルヲ本旨トスル者ニシテ、總テ事業上ニ顯ハ

ル、權カヲ以テ、法ノ出ル所ト為ス、故ニ現ニ權
 カニ因テ成功シタル事業ハ、即直ニ法トナシテ
 此他決シテ法ト稱スヘキ者アラストシ、又現ニ
 權カ足ラスシテ、成功スルヲ能ハサリシ事業ハ、
 即直ニ不法ト為シテ、此外決シテ不法ト稱スヘ
 キ者アラストス、是故ニ覆法ノ事業モ、遂ニ其効
 ヲ奏スレハ、直ニ取リテ當理ノ事トナシ、若シ其
 効ヲ奏スル能ハサレハ、直ニ斥シテ非理ノ事ト
 ナス、總テ此ノ如ク、唯今日事業ノ成敗ノミヲ以
 テ、理非善惡ヲ定メ、以テ法不法ノ因テ起ル根源

トヤス、斯法トナシ、或ハ不法トナシテ、取捨スル
 所、專ラ今日ノ形勢時態ニ因ルカ故ニ、形勢時態
 忽^チ轉遷スレハ、其取捨亦之ニ應シテ變化スルモ
 ノニシテ、絶^テ道ノ正邪、理ノ當否ニ依リテ、法ヲ
 論スルヲナシ、

此學派、佛國顛覆^リ、按王^一千七^百八^十九^年體^ニ顛覆起
 リ、按王^一千七^百八^十九^年體^ニ顛覆起
 タ^リ以來、歐羅巴大地^ニ、按英^國陸^地ヲ除キ、全^ニ於^テ、再^三
 實際ニ用ヒラレ、嘗^テ此論ニ反セシ徒ス^テ、遂^ニ
 之ヲ信用シ、普ク國法ノ理ヲ誤ルニ至リシハ、真
 ニ歐洲ノ不幸ト云フヘシ、[○]

○[○]按佛國ノ顛覆歐洲各國ニ波及シテ、一千
 七百年ノ末ヨリ、八百年ノ初ニ至リ、各國民
 人肆マ、ニ王室ヲ倒シ、以テ民主政體ヲ立
 ント企テシテ云フ、全ク此災害ヲ免レシハ、
 獨リ英國ノミ

此學派者流時勢ノ變化ニ因テ、法モ亦變化スル
 所以ヲ論スルハ、大ニ見ルヘシ、雖^レ、絶^テ理義
 ニ著眼シテ、法ノ善惡可否ヲ論スルヲナク、唯今
 日事業ノ成敗ノミヲ以テ、法ヲ論スルハ、甚^ク僻論
 ニシテ、其害最モ甚カラス、假法ノ轉シテ真法ト

ナルヤ、國家民人之ヲ當然ノ事トシテ、認許スルニ因ルノミ、但シ國家民人實ニ之ヲ認許セシト否トハ、儘定斷シ難キヲナキニアラス、去レ之ヲ認許スルノ機會、全ク無シト云ハ、甚タ不可ナリ、即チ左ニ舉ル所ノ數條ハ、此機會ノ至ルト否ノ分界ニシテ、又之ニ由リテ、國法期年ノ至ルト否トス、知リ得ヘシ、

〔甲〕國內ニ於テ、二黨（即チ一ハ新黨ニシテ、舊政府ヲ防拒シ、新政府ヲ保テ、舊黨ニシテ、新黨ヲスル者ノ間、變化ノ為ニ起リタル、争鬭未タ止マ

スシテ、國家民人未タ嘗テ一般ニ新黨ヲ認許スルニ至ラサレハ、變化一新ヲ遂ケント欲スル所ノ黨與（即チ新ノ勢力、縱令ヒ大ニ舊黨ニ超フトイヘド、未タ國家民人之ヲ認許セシ機會ト云フヘカラス、故ニ國法期年モ、亦未タ至ルト云フヘカラス、

〔乙〕新黨遂ニ舊黨ヲ壓倒シテ、一時全勝ヲ獲タリトイフド、勢未全ク一新セス、民心亦全ク服従セズ、動モスレハ舊黨再ヒ起ラントスル機アルハ、假法未全ク真法トナリタリト云フ可カラス、

按新黨ノ法制未實ニ真ノ法制ト称スルニ足ラサルヲ云

〔丙〕國家ノ法制秩序ヲ保護ス可キ權利義務ヲ執ル所ノ國家職官等、新法制、新秩序ヲ默許、或ハ明許セサレハ、真ニ假法ノ轉シテ真法トナリシト云フヘカラス、但、國家ノ權柄ヲ握レル諸府、憲立及ヒ司法府又ハ國民之ヲ默許、若クハ明許スルハ、更ニ要ナリトス、

〔丁〕各國政府ハ、互ニ各國ノ和親平安ヲ保護スヘキ者ナルカ故ニ、外國政府、亦之ヲ認許スルヲ要ス、○右ノ諸件悉ク備リテ、一モ遺ス所ナクレハ、

是ニ於テ假法始テ實ニ真法トナレリト云フヘク、初、覆法人所業ト目セシモノモ、遂ニ轉シテ當理ノ事トナルヘシ、
第二派守法ノ學派セ、テギナミス、チタル者ア、此學派ハ、殊ニ法ノ理義ニ出ルヲ貴ヒ、恒ニ之ヲ變革セサルヲ以テ本旨トナス、故ニ唯今日事業ノ成敗ニ因テ、法ヲ論スル所ノ成功事業派ト全ク相表裏ス、是ヲ以テ此學派ハ、大ニ取ルヘキ所アルカ如シト雖、亦甚、偏倚スル所アルヲ以テ、遂ニ取ル可カラサルニ歸ス、

素守法^レテ^レギ^トチ^ミト云^ヘル語ハ、法制ヲ遵守スル
 ノ義ナレハ、此學派者流實ニ今日ノ形勢事情ニ
 適應スル法ヲ守ルヲ以テ本旨トスレハ、真ニ是
 間然スヘキ所無シト雖^モ、其本旨トスル所、反テ
 此ノ如クナラス、更ニ時勢ノ變遷轉化ニ著眼ス
 ル^トナク、徒ニ舊法古制ニ拘泥スルカ故ニ、實ニ
 今日ノ形勢事情ニ適應セサル、死法ヲ墨守スル
 モ^ノニシテ、真ニ有名無實ト云フヘキノ^ミ、是即
 此學派ノ大ニ偏倚スル所ニシテ、敢テ取ル可カ
 長サル所以ナリ、故ニ此學派ハ、元來法ノ理義ニ

出ルヲ以テ本旨トスレ^モ、其守ル所ハ却テ理義
 ニ出テ^ス、猶死體ヲ抱テ以テ生力感^ナ入^下為
 スカ如シ、其陋愚モ亦甚シト云フ^人、○總テ此
 學派ヲ唱^テル徒^ハ、絶^テ今日時勢、轉遷變化、及
 ヒ人知^シ開明進歩スル所以^ノ理^ヲ、知^ラサルカ
 故ニ、常ニ舊法古制ノ區域ヲ出ル^ト能^ハス、然ル
 ニ古今萬國ノ沿革ヲ歷視スルニ、時勢ハ實ニ此
 徒ノ見ルカ如ク^ナラス^シテ、流行變遷日々止ル
 ナ^シ、基督ノ語ニ之^レ有^リ、曰ク、死人ヲ埋葬スルハ、
 死人ニ任^セテ可^クナ^リト、○

國法紀論 卷一 第六

○〔按約書ニ載スル所ノ語ニシテ、或人將ニ
基督ニ服從セントスルニ方リ、先ツ死人ヲ
埋葬シテ、然後ニ服從セント云ヒシ時、基督
之ニ答テ云ク、死人ヲ埋葬スルノ事ハ、死人
ニ任シテ可ナリ、汝敢テ勞スルヲ要セス、直
ニ余ニ服從スヘシト、今茲ニ此語ヲ以テ比
喩シテ、今日ノ用ヲ為サニレハ、猶死人ノコ
トシ、故ニ此ノ如キ死人ハ、死法ヲ守ルヘシ、
仍、生力盛ナル徒ハ、敢テ此ノ如キ死法ヲ守

ルヘカラスト云クノ意ナリ、
古今邦國甚多シト雖、此學派ノ如ク、絶ヘテ時
勢ノ變遷轉化ヲ知ラス、徒ニ舊法古制ヲ墨守シ
テ、仍、存在スルヲ得シ者ハ、未タ曾テ有ラサル
ナリ、然ルニ近令尚此論ヲ主張シテ、遂ニ國家ノ
災害ヲ釀セシ者少カラス、真ニ慨歎スヘキナリ、
〔附論第一〕ニ一ブル 〔按〕國人生レ、其八百七十
一年ニ、顛覆史ニ云、覆法ノ業モ、遂ニ期年ヲ
經テ、當理ノ事トナレハ、國法ニ於テ之ヲ許ス
ヲ理、宛モ私法ニ於テ、假所有ノ期年ヲ經レハ、

國法紀論 卷一 第六

真所有トナルヲ許スノ理ニ同シ、

〔附論第二〕教王ツツカリアス、及ヒフレンジン

〔按〕中古歐羅國民第八世期〔按〕紀元七百年代ト

云フモ、皆ニ於テ、此ノ如キ守法論人、敢テ取

ル可カラサル所以ヲ、證明シタリ、何者、教王ツ

ツカリアスハ、守法論ノ取ルニ足ラサル所以

ヲ論シテ、真ニ君主ノ職ヲ盡シ、且ツ自ラ能ク

其權カヲ施行スル所ノ者、實ニ君主ノ稱ヲ得

タルヲ當然ナリト云ヒ、又佛朗哥國民、既ニ久

シク君職ヲ汚シテ、徒ニ有名無實ノ位ヲ保テ

ルメロインゲル氏ノ王位ヲ奪テ、現ニ政柄ヲ

執レルヘルツォフ〔按〕爵名、通常カロリンゲル氏

ヲ、遂ニ王位ニ進メタレハナリ、○

〔按〕紀元七百五十二年天平勝カロリンゲ

ル氏ピピンデル、カライ子ル、メロ井ンゲル

氏ヲ倒シテ、自ラ佛朗哥國ノ王位ニ登リタ

リシカ、是皆教王ツツカリアス、及ヒ佛朗哥

國民ノ助ケレ所ナリ、彼有名ナルカルデル、

ゴローセ〔甲利大帝〕ハ、此ビピンデル、カライ

子ルノ子ニシテ、大ニ其版圖ヲ増大シ、遂ニ

羅馬國ヲ復興シテ羅馬帝トナリタリ

同上第三奧地利帝ヨトセフ第二世按一千七百

十年ニ生レズ、嘗テ普魯士王非的利第二世又非的利

大王ト稱ス、一千七百十二年ニ書ヲ贈リテ、守法

ノ意ヲ述ヘタリ、但シ其意ハ却テ成功事業ノ

論ニ近シ、其書ニ云、陛下ハ即チ君主ナリ、陛下

果シテ君主ナラハ、必君主ノ權利ヲ知リタマ

ハサルノ道理アル可ラスト余カ土耳其國ヲ

攻ント欲スルヤ、唯嘗テ彼ニ奪掠セラレシ州

郡ヲ復スルノ外、決シテ他意アルニアラズ、是

即チ舊法ヲ守ラント欲スルナリ、嘗テ失ヒシ

土地ヲ復セシト謀ルハ、豈唯土耳其人ノ意ニ

止マランヤ、○

○按一千七百十八年享保ニ於テ奧地利先

帝カル第六世土耳其ノ地ヲ略セシニ、其後

一千八百三十八年天保ニ於テ土耳其ノ為

メニ再ヒ奪ヒ返サル、故ニヨトセフ第二世

此ノ如キ論ヲ發セシナリ、去レ尺條理全ク

整ハス、取ルニ足ラサルナリ、

同上第四一千八百十四年文化十佛國恢復一

千七百年代ノ末ヨリ、那破倫第一世帝位ニ登
 リテ政ヲ專ラセシメ、一千八百十四年ハ大
 敗ニヨリテ、帝位ヲ奪ハレシカハ、政柄再ヒ
 旧王室ニ復シタリ、故ニ之ヲ恢復ト云ス
 時ニアタリテ、ヒュルストタルレンドナル
 者、遮一八七五年ニ死ス、生舊王室ノ寶
 祚ヲ得ルヲ當然ナリトシテ、守法ノ論ヲ主張
 シ、以テ覆法顛覆ノ論ヲ擯斥セシカハ、其論甚
 褊少且ツ教法ノ意及ヒ國家ヲ以テ君主私有
 トスルノ意ヲ間ユルカ故ニ、全ク中古ノ世ニ
 適スヘクシテ、決シテ方今文明ノ世ニハ適セ
 ス、

第十款

研究ノ方法、バトニデク、ンデク、

國法學ヲ研究スル方法數種アリ、就中正方二類
 アリ、變方亦二類アリ、其正方二類ト云フハ、即探
 理國法論、ヒトソヒセ、及ヒ探蹟國法論ヒストリ
 第四款ニ出ツ、是ナリ、又變方二類トハ、即正方二
 類ノ大ニ偏倚セル者ニシテ、一ヲ偏理國法論、ア
 ストラクト、イデオト云ヒ、ニヲ偏蹟國法論、ア
 ロギセ、メトイデ、オト云ヒ、ニヲ偏蹟國法論、ア
 イチダ、エムト云フ、即チ第一ハ探理國法論ヨ
 リセ、メトイデ、オト云フ、即チ第一ハ探理國法論ヨ

リ變生ニ、第二ハ探蹟國法論ヨリ變生レタル者ナリ、

此ノ如ク探理探蹟ノ二方相生セシハ、素法ニ、理義ニ出ル者ト、事蹟ニ出ル者トノ二類アルト、且ツ國法ヲ研究スル徒ハ、氣質各相異ナルトニ由ルナリ、

法ハ素性理ヲ以テ其精神トナス、故ニ必理義ヲ含有セサル可カラス、去レル今日ノ實際ニ用フルニ至リテハ、又今日ニ適スル形體有ラサル可ラス、然ルニ偏理法論ノ如キハ、全ク其今日ニ適

スル形體ノ要ナル所以ヲ知ラスニテ、絶テ之ヲ注意セズ、故ニ國法ヲ論スルニ、唯理ノ當否是求メテ決シテ國家ノ實際ニ適スルト否トハ、著眼スルコトナシ、○普拉土スラ尚其レプブルキ（本卷第出ハ款ニノ法ヲ論スルニ方リテ、此ノ如キ弊ニ陷ルヲ知ラスニテ、大ニ人ノ性情ニ戻レル制度ヲ立テタリ、去レル普拉土ハ知識頗ル廣博ニシテ、且ツ好テ制度ノ態勢ヲ精美ニセシカハ、其論中絶テ枯瘦缺乏ノ弊アルヲ見ス、然ルニ近今ノ學者ニ至テハ、其論中動モスレハ枯瘦缺乏ニテ、全

備セサル者多シ、○國家ハ道義ヲ含メル有機體
〔我〕有機體トハ、各部ノ機關アルト云ヘルニ
シテ即活物ヲ云、國家ノ機關、立法府、法院等ノ如
キ各部ノ故ニアルヲ猶以テ活物各部機關アルナリ、カナル
カ故ニ、決シテ獨リ性理ヨリ生セン者ニアルス、
其法亦決シテ性理論ヲ集録セン者ニアルス、
是故ニ偏理法論ハ、學科上ノ研究ニ於テハ、遂ニ
無用ノ長物ニ屬シ、又之ヲ實際上ニ施ス時ハ、實
ニ恐ルヘキ災害ヲ生ズ、遂ニ現立法ヲ破碎顛覆
スルニ至ルヘシ、國家將サニ傾覆セントスル時
ニ方リテハ、民心暴ニ發動シ、此ノ如キ法論ニ依

據シテ現立憲法ノ限界ヲ破壊セント欲スルノ
情愈盛ナルヲ以テ、此論方ニ盛強ノ威力ヲ得其
勢宛々惡鬼ノ如ク、遂ニ萬類ヲ傾倒スルニ至ル、
○佛國ノ顛覆ハ、民心暴ニ發動シテ、此偏理論ヲ
實際ニ施セン者ナリ、以テ此論說ノ誤ラサルヲ
明證スルニ足ル、〔我〕破倫〔世〕第一ノ語ニ、性理者流
遂ニ佛國ヲ傾倒シタリト云ヒシハ、確言ト云フ
ヘシ、〔我〕佛國偏理論ノ鼻祖ハ、ルウソウニシテ、
猶ニ用ヒ、今ニ至リテ其餘毒○佛國ニテハ性理家、
盛ニ自由、ハイト、及ヒ同等〔民〕絶テ貴賤尊卑等ノ

等別ナリト全ク同ノ權利ヲ主張シテ佛國ヲ瓦解セ
 シ人、遂ニ流血ヲ以テ之ヲ灌キ獨乙國ニテハ學
 者、君主政體ノ理ヲ主張スルヲ甚シキニ過キテ、
 公事自由ノ權利人會合チテ權利ヲ結社ノ權利ト、
 民ノ權利等、其他民人ノ國事ヲ遮欄限制シ、又歐洲
 列國、各其國論ヲ主張スルヲ甚過盛ニシテ、遂ニ
 歐洲一般ノ平和ヲ妨害シタリ是ニ由テ之ヲ觀
 レハ、縱令大ニ確實ノ論ニシテ、實ニ國家ニ益ア
 ルモノトイヘド、單ニ據テ之ヲ講究シ、加フ
 ルニ偏少狹窄ノ見ヲ以テ、之ヲ實際ニ施サント

欲スルハ、其害舉テ云フヘカラス、
 之ト相反スル氷炭ノ如シト雖、亦甚偏倚セル
 モノハ、即偏蹟法論ナリ、此論ハ專ラ現立ノ法、或
 ハ從來ノ實迹ニノミ拘泥スルカ故ニ、其研究ス
 ル所、絶_エテ理ノ當否ヲ考索セス、徒ニ古今ノ事蹟
 ヨリ、法ノ成材ヲ湊合スルノミ、此法論古今實際
 ニ用ヒラレシメテ多ク、殊ニ威權ヲ專擅セント欲
 スル奸臣等ノ、尤モ好テ取ル所ナリ、○此法論ハ、
 偏理論ノ如ク、直ニ國家ヲ覆滅スルニ至ラスト
 雖、小害自カラ積重シテ遂ニ大害ニ至リ、以テ

全國ノ安寧ヲ破リ、其道義カヲ銷シ、其元氣ヲ傷
 久、譬ヘハ光輝アル劍ニ漸ク銹鏽ヲ生シテ曼衍
 シ、遂ニ光輝ヲ全蝕スルカ如シ、是時ニ至リ、之ヲ
 既倒ニ救テ、恢復ヲ謀ラント欲スルモ、亦輓回ス
 ル能ハス、甚キニ至リテハ、遂ニ滅亡ニ歸スルノ
 亦如何トモスヘカラス、○偏理論ノ國家ヲ害
 スル、其迅速ナル、譬ヘハ急性熱ノ迅劇ニシテ立
 トコロニ死生ヲ決スルカ如ク、又偏蹟論ノ國家
 ヲ傷フル、其遲緩ナル、譬ヘハ慢性病ノ緩慢ニシ
 テ、容易ニ死生ヲ決セスト誰モ、遂ニ痼疾トナル

カ如シ、
 探蹟法論ト偏蹟法論探蹟論ハ正方ニシテト
 偏蹟論ハ其變方ナリ
 ヲ擧ケ、比シテ其異ナル所以ヲ論セシ、探蹟論ハ、偏
 蹟論ノ如ク、徒ニ現存ノ法、或ハ從來ノ實迹ニノ
 ミ拘泥シ、漫ニ之ヲ尚重スル者ニ非ス、必古今變
 遷沿革ノ迹ヲ探討シ、其開明進步ノ實ヲ考察シ、
 以テ其理義如何ヲ通考ス、故ニ實際ニ著眼スル
 ヲ主旨トスレモ、苟クモ之ニ拘泥スルヲナク、必
 ス其間ニ取捨損益ノ權度ヲ存ス、
 純正ノ探理論ハ、能ク此探蹟論ト相合スル者ニ

レテ、徒ニ空理ニヨリテ法ヲ論スル者ニ非ス、必
理ト實トノ二件ニ著意シテ決シテ、其一ヲ失フ
トナシ、唯探蹟論ニ於テハ、先時勢ノ沿革ト、古今
ノ進歩ヲ追考シ、而シテ後理義ノ分割ニ及ホス
ト雖、探理論ニ於テハ然ラス、先人性ヲ識別シ、
理義ヲ探討シ、而シテ後時勢ノ變遷ニヨリ、人心
ノ感動各相異ナル所以ヲ考察ス、是此二方ノ相合
スト雖、亦別アル所以ナリ、
古今許多ノ碩學アリト雖、實ニ此二方探探蹟蹟
交ニ兼備スル者ハ、殆、罕ナリ、其故ハ、各天賦ノ氣

稟ニ因テ、專ラ一方ニ偏スルハナリ、亞立斯度德
爾ノ如キハ、實ニ二方ヲ兼備セシ者ニシテ、真ニ
感歎スルニ堪ヘタリ、此人太古ニ生レ、未、文明開
化ノ盛世ニ遇ハサリシカ、其講論セシ所以、國
家學ハ、真ニ後世千歲ノ龜鑑トナリテ、今ニ至リ
テ仍、凶フルトナシ、又羅馬人西施羅按有名ナル
十紀元前百零六年ニ逢ヒタリ、同、希臘諸碩學ノ講
究セシ性理ヲ以テ基本トシテ、國家學ノ範圍ヲ
造リ、羅馬國治平ノ實際ヲ以テ、其中ニ充テタリ、
○佛人ボヂン、按一千五百三十七年ニ死ス、以太利

國法九論
四百六
文部省

人トコ、其按一千六百四十六年十一月二十九日死スル、英人バヌデ、
 ヘルラム、其按一千六百五十六年十一月二十一日死スル、ハ、近世ノ
 學者中ニテ、理蹟ノ二方ヲ兼備セシ巨擘ト云フ
 ヘシ、又英人ベルク、其按一千七百七十九年十一月二十一日死スル、
 亦英國ノ國家學ヲ講スルニ方リテ、西施羅ノ如
 ク善能ノ說辭ヲ以テ、先ッ其沿革事蹟、及ヒ形勢ヲ論
 じ、又性理ノカヲ以テ、大ニ此學ヲ潤飾シタリ、○
 以太利人マキアエル按、其按一千七百六十九年十一月
 死スル、其著書中、自ラ辛苦艱難ヲ當リ、人性民情ニ
 通曉シ、以テ發明セシ所ヲ辨論シ、佛人孟得斯答

其按一千六百五十八年十一月二十九日死スル、ハ、活眼ヲ以テ自在
 ニ人世ヲ洞觀シ、以テ其發揮セシ精美ノ理ヲ辨
 論セリ、實ニ此兩氏ハ、能ク理蹟ノ二方ヲ兼備ス
 ト云フヘシ、但シマキアエルリノ論ハ、專ラ探蹟
 ニ屬シ、孟得斯答ノ論ハ、專ラ探理ニ屬ス、又瑞士
 ノ佛語ヲ用フル地方ニ生レタルルウソウ、按一千七
 百一十二年瑞士ノゲンフニ生レテ、後ニ及ヒ英人
 ベンテム、按一千七百三十二年十二月二十一日死スル、ハ、獨乙ノ諸
 學者ノ如ク、專ラ理論ヲ旨トシテ、之ニ偏スルヲ、
 殆ク此論ノ鼻祖タル普拉トヨリモ甚シク、遂ニ

空理ニ陷レリ、
 以上論スルカ如クナル故ニ、理蹟ニ方ハ、決シテ
 相矛盾スル者ニアラス却テ五ニ相資益スル者
 ナリ、故ニ史學者流自ラ知ル所ヲ以テ、法斯ニ盡
 セリト為シ、其他決シテ新法ノ生スヘキ者アラ
 ストセハ、是甚褊狹ナル識見ト云フヘク、又理學
 者流自ラ窮ムル所ヲ以テ、理斯ニ盡セリト為シ、
 其他決シテ理ノ求ムヘキ者アラストセハ、是甚
 淺陋ナル識見ト云フヘシ、純誠ナル史學者ハ、必
 性理ノ貴重セサル可カラサルヲ知リ、兼テ之ヲ

學ト、真正ナル理學者ハ、必事蹟ノ考索セサル可
 カラサルヲ知リテ、併テ之ヲ學フナリ、
 但、理蹟ニ方共、必利害ヲ兼有スル者ナリ、即探蹟
 論ノ利ト稱スヘキハ、殊ニ其効驗ニ富ミ、且、適實
 ナルニアリ、蓋、史書載ル所古今ノ事蹟ハ、千狀万
 態ナル實迹ニシテ、且、大ニ確證トスルニ足ルヲ
 以テナリ、○縱令、碩學鴻儒ノ發揮セシ理ト雖、
 之ヲ古今ノ實際ニ顯ハレシ理ト比較スルハ、
 僅ニ微薄ノ碎片ニシテ、譬ヘハ霧霞ノ浮霏ナル
 カク、決シテ確實ナル能ハス、但、又探蹟家ノ害

國語 卷一 音

稱スヘキハ其胸中古今ノ事蹟ニ富ムヲ以テ
遂ニ理ノ一途ニ歸スルニ暗ク古今沿革ノ千差
萬別ナルニ迷フテ理非得失ヲ辨スルヲ能ハス
且常ニ既往ノ事歴ニ束縛セラレ、自在ニ現今ト
將來ノ事ニ注思スル能ハサルニ在リ、但探蹟論
ニ於テ全ク此弊ヲ避ク可ラサルニ非サ、氏古
今許多ノ探蹟者流ヲ歴覽スルニ能ク此弊ヲ免
カレシ者ハ甚罕ナリ、
又探理論ノ利トスヘキハ殊ニ其立論ノ純清單
一ニシテ常ニ理ノ一事ヲ以テ其至極ノ目的ト

為シ終始此目的ニ到著スルヲ以テ本旨トスル
ニ在リ、故ニ其効驗ニ至テハ殊ニ人性天理ニ出
ルモノナリ、但シ常ニ理ノ極ニ到著スルヲ本旨
トシテ之ニ全カヲ竭スヲ以テ一理中亦自ラ數
理ノ存スルヲ悟ラス、且古今實際ノ千差萬別ナ
ルニ暗ク及ヒ古今萬方風俗人情ノ差異アルヲ
詳ニセズ、一概理ニヨリテ萬事ヲ裁定セント欲
スルカ故ニ遂ニ時ト處トニ適應セル法ヲ立ル
ヲ能ハス、徒ニ有名無實ノ空理ヲ主張シ、尚且天
然生育ノ理ヲ知ラサルヲ以テ譬ヘハ未熟ノ菓

國語 卷一 音 至 一 頁

實ヲ摘テ、以テ之ヲ美味トシ、無根ノ樹木ヲ植テ、
 以テ成長スヘシト思フニ均ク、常ニ理ヲ索メ
 テ遂ニ空理ニ流ル、是レ即探理論ノ害ト云フヘ
 シ、古今許多ノ理學者流、能ク此弊ヲ踏サル者ハ、
 殆ト罕ナリ、

緒論終

大井潤一校

國法汎論首卷終

